

幼児の自由表現の指導に関する考察

—表現運動の学習体系と幼児の表現指導—

荒木 恵美子

はじめに

ダンスが学校教育の中において、果たす役割は何か。ダンスはこれまで、常に、体育の中に領域として置かれ、体育の目標を達成するべく施行されてきた。しかし、ダンスが「身体によるリズムカルな表現活動であり、創造力を養い、美的情操を高める」ことを特色とすることから、ダンスを通して体育目標を達成することが、やや希薄になっていると常々考えるのである。何故ならば、文部省の示す体育目標は「健康や体力についての理解と運動の合理的な実践を通して、健康の増進と体力の向上を図り、心身の調和的な発達を促すとともに、明るく、豊かで活力のある生活を営む態度を育てる」^{註①}（高等学校）となっているように、その目標の中にダンスの特性が生かされていないのである。それは、小学校、中学、高校、いずれの段階においても共通の問題であり、ダンスは体育か、芸術かと常に問われるのである。それに比べて、幼稚園教育要領は「身体による表現」に関しては、「音楽リズム」の領域で創造活動をさせるよう示しており、「リズムカルな身体運動」に関しては「健康」の領域にも重複して示している。このように2領域にわたって内容が示されることは、実施の段階で非常にあいまいであったり、複雑でもあるが、少なくとも、身体による表現は、幼稚園教育要領の「基本方針」(5)に示されている「のびのびとした表現活動を通して、創造性を豊かにするようにすること」^{註②}に準じて、音楽や絵画製作と同様に、表現性が大切にされているのである。ただ、身体表現が、音楽と同居している所に、しばしば、問題が生じるのであるが、そのことは、他の機会に論じたい。ここでは、ダンスがその特性を生かしながら、教育目標を達成しようとするなら、ダンスは体育の傘下にいるより、芸術の分野において、本来の有り方を発揮するのが望ましいと言いたいのである。川口^{註③}は「ダンス教育においては、ダンスの文化特性を踏まえ、「ダンスの教育」と「ダンスによる教育」の二側面から教育の本質に接近しようとしており、「心身ともに豊かな人間の育成と舞

踊文化の発展を期待している」と言う。そして「ダンスの教育」については、現在、松本ら研究者グループの提案に基づく指導法、すなわち、ダンスを踊り、創り、観るという一連の技術の獲得と、運動からイメージを掘り起し、また、イメージから運動を導き出すという、運動とイメージの関連から感受性を洗練する等、ダンスそのものの把握と楽しみをめざす側面を推進している。そして、「ダンスによる教育」については、これらの体験過程における自己開示と変身、創意工夫の楽しみ、一つの目標を達成する喜びと、そこでの相互理解を深めるなど、ダンスを通して得られる人間的価値をさし、これらの二面的活動の中での、幼児、児童、生徒と教師との人間接触によって、豊かな全人的な教育活動が成立することも述べている。その他、多くの指導者も同様の理論に基づいて、ダンス指導を行なっているのであるが、指導法が未だ十分確立されたとは言えない。ダンスが、身体活動を通すということ、あるいは、身体運動を通して、という点に他の体育種目と共通の要素があるから、ダンスも体育であるという事にはやはり無理が生じると考えるのである。もし、あえて体育に含めるのであれば、少なくとも、教科目標の中にダンスの特性が生かされるねらいを含めなければならないと思うのである。

我々、研究グループは、ダンスを独自の立場から特性を十分生かした教育活動となるように、幼稚園から高校までの発達段階に合わせ、それぞれ系統的に具体的な目標を挙げることを試みた。そして、ダンスがより多くの子供たちに理解され、踊り、創り、観て楽しみ、舞踊文化して、一人一人の心に生涯、息づくようなダンス活動にしたいと研究活動を続けている。今回はこのような前提のもとに、「ダンスの教育」にも「ダンスによる教育」にとっても重要な要素の一つである運動のもつ表現性について考察し、自由表現(幼)、表現運動(小)、ダンス(中・高)の系統的な教授・学習過程作成のための資料にしようとするものである。そして、その学習体系の中において、幼児期の動きのリズム(自由表現)の指導はどのように推進するのがのぞましいかを探ろうとするもの

である。

(1) 運動と表現運動について

ダンスにとって運動は生命である。どんなすばらしいイメージや内容も身体運動による表現がなければダンスは存在し得ないのである。しかし、ダンスで言う運動は体操、陸上競技、水泳などのように「より速く」「より遠くへ」「より強く」という技や記録を追求するのと異なり、その運動を生み出す内的な面が重要な役割を果たす。運動選手が優勝したとき、感激のあまり、思わず顔を紅潮させ、両手を力いっぱい上につき挙げながら跳び上る姿、また、一緒にがんばったチームの人達が思いきり駆けよって、がっちり抱き合い、跳び上りながら、ぐるぐる回る光景など、ここで言う「跳び上る」動作は、より高く跳び上ろう、より遠くへ跳ぼうということではなく、優勝という感動が身体の外面にあふれ出た運動である。それは感情そのものが表現された身体表現としての運動であり、日常言語を強め、あるいは、動作により代弁する感情表現と言えるであろう。ここに、運動がダンスに変容するもっとも原初的な根源を見るのである。すなわち、ダンスは身体の運動を通して創造的に表現的に構成し、人間行動としての実際の日常運動から、空間における身体動作として詩的水準にまで変形して行くのである。ゆえに、ダンスが芸術として、その存在を確かなものにし、それを効果的に学習させるためには、日常運動が感動を内包した表現的運動に置きかえられるような手だてが必要となる。すなわち、運動のもつ表現性を理解することである。例えば、前述の「うれしいとき跳ぶ」という身体表現としての運動は、無言のコミュニケーションとしての型をもつことである。それは、楽しさ、躍動感、力動感、律動感などであり、日常生活における感情を代弁する多くの運動は、その感情の型との関わりにより類型できることである。自己の持つ表現内容を観者に、より強く伝達するために、これら運動のもつ典型的な表情は何かを押えた上で、どのようにデフォルメすれば良いか、内容の掘り下げをしつつ、独自の表現性を持ったダンス的運動への変容を試みるのである。一方、これらの運動は、的確で美しく、滑らかで流れのある習熟された動きが要求されることは言うまでもない。習熟された動きは美しさを招き、表現性はより高められ、質の高いダンス的運動へと変貌するのである。また、素材としての身体の可動性や柔軟性、協応性、力動性などの訓練を重ねる過程において、運動のもつ表現性に気づき、掘り起こされることは多くの指導者が経験するところである。反復トレーニングを行なう中で、運動のもつ性質

をみつけ、表現性への理解を深めながら進めたいものである。それが、踊り手と観者が一体となって感動を呼ぶほどのダンス技術習得の入口と言っても過言ではないであろう。上記のことから、運動のもつ表現性を具体化するために、運動を運動のもつ表現性について分類、整理を試みる。

(2) 運動の分類と運動のもつ表現性について

表現の基礎となる運動を大まかに分類すると、歩く、走る、跳ぶ、這う、転がるなどの基本的な移動運動、屈伸、伸縮、振動などその場の運動、また、押す、引く、よじ登るなど日常動作としての運動があげられる。これらの運動は日常動作と同じようにダンスの動作にも取り入れられる。そして、基本的運動要素である空間、時間、力性、流れなどを機能させ、感情を移入させることによって、その運動は表現運動、すなわち、ダンスへと向かう。基本となるそれぞれの運動にどのような表現性をみることができるかを、三浦の分類も参考にして次の表のようにまとめた。

表1. 運動の分類とその運動から感じられる表現性

	移動運動	その場の運動
基本的全身運動	<ul style="list-style-type: none"> 歩く (静か、落ちつく、力強い) ふつうに、しゃがみこんで、伸び上って 走る (軽快、明るい、高い動感) ふつうに、小走り、大股で 跳ぶ (律動的、力動性、楽しい) 両足とび、片足とび、スキップ ホップ ジャンプ 這う (原始的、暗い、苦しい) 四つ這い、腹這い、横這い 回転 (なめらか、優しい、甘い) 横転、前転、後転、側転 リープターン (軽やかさ) 	<ul style="list-style-type: none"> 屈伸 (硬い、鋭い、柔らかい、甘い) 伸縮 (希望、暗い、淋しい、弱い) 振動 (なめらか、柔らかい) 回旋 (立体感、優しい、暖かい) 自転 (若々しい、優しい) 捻転 (柔らかい、反抗、否定、優しい) 波動一蛇動 (押し寄せる、伝わる) 平均 (バランスを保つ、重さをまとめる) 例 (不安定) 静止 (ポーズ)
日常的動作	<ul style="list-style-type: none"> 押す (力強さ) 引く (力強さ) すべる (なめらか、流れるような) 登る (力強さ、忍耐) 泳ぐ (浮く、軽快、リズム) 	<ul style="list-style-type: none"> 拍手 (律動性) 打つ (力強さ) こする、なでる (やさしさ) 寝る (安定) 起きる (生命力、息吹き) 坐る (静か、落ちつく) 屈膝、伸膝、膝立ち 捕る 投げる
組み合わせの運動	<ul style="list-style-type: none"> 移動の運動+その場の運動 例 $\left. \begin{array}{l} \text{歩} \\ \text{走} \\ \text{跳} \end{array} \right\} \text{く} + \left. \begin{array}{l} \text{止まる (ポーズ)} \\ \text{屈伸} \\ \text{振動} \end{array} \right\} \text{など}$ 	
複合の運動	<ul style="list-style-type: none"> 移動しながら+その場の運動 例 $\left. \begin{array}{l} \text{歩} \\ \text{走} \\ \text{跳} \end{array} \right\} \text{きながら屈伸} + \left. \begin{array}{l} \text{走りながら回旋} \end{array} \right\} \text{など}$ 	

(3) 発達過程にみられる表現運動の特徴

上記の表現性をともなった各種の運動が発達段階に即

して、学習し易いように体系化されることが大切であろう。

次に示す2つの実験は幼児から高等学校までの生徒を対象に表現させたものである。

実験① 題材「蝶」で自由表現をする。^{註④}

実験② 「リズム反応テスト」で音楽から受ける感じを動いたもの。^{註⑤}

上記2実験において、生徒が自由に動いた表現動作から、それぞれの発達段階において出現した運動動作を分析すると次の表2の通りである。

表2. 自由に動いた表現動作の年齢別特徴

	実験① 自由表現・題材「蝶」より	実験② リズム反応テスト ⁴ 拍子より
3歳	★跳躍 ★腕上下しながらスキップ ★小走り ・腕上下しながら小走り ★腕の屈伸 ・ウオーク	★スキップ ・片腕振動しながらウオーク ★両足とび ★ウオーク ・四つ這い ・体前屈してウオーク ・胸屈伸しながらウオーク ・手首キラキラ ・しゃがんで両足とび
5歳	★小走り ★腕上下しながら小走り ・腕の屈伸 ★ウオーク ★跳躍	★ウオーク ★両足とび ・ランニング ・片腕振動しながらウオーク ★スキップ ・しゃがんで両足とび ・腕上下
小学校2年	・小走り ・腕上下しながら小走り ・ウオーク ・腕上下しながらウオーク ・腕の屈伸 ★体前屈 ・伏臥 ★回転 ・腕の上下 振動 ・跳躍	・スキップ ・しゃがんで両足とび ・両足とび ・ウオーク ・腕をなびかす ・追歩 ・後ろにウオーク ★スキップとウオーク
小学校5年	・跳躍 ・腕上下しながらスキップ ・小走り ・腕上下しながら小走り ・腕の上下 ★振動 ・ウオーク ・腕の屈伸 ★波動 ★回旋	・スキップ ・ウオーク ・両足とび ・足ぶみ・しゃがんで両足とび ★ギャロップ ・追歩 ★ギャロップとポイント ★金づちでたたく ★両足とびで一回転
中学2年	★振動 ・ウオーク・回転・屈伸 ・波動 ★回転してしゃがむ ★ビルエットターン ★つま先立ちターン ★リープターンとウオーク ★ウオークとジャンプ ★追歩してジャンプ ★追歩してジャンプ ★追歩してバランス ★ウオークして○○(種々)	★伸びる ・ツーステップ ・ウオーク ★ホップ ・ウオーク ターン ★体前屈 ・追歩 ★すわる ・ターン ★ターンしてポーズ
高校2年	・屈伸 ・ウオーク ・振動 ★ウオークして○○(種々) ★フット オロしてバランス ★回転してポーズ ★フットしながら腕上下	・ホップ ・ウオーク ・ツーステップ ・体前屈 ★ウオークしてターン ・後そり ・後ろにウオーク ・腕流す ★体前屈 ・ウオークしてホップ ★ピボットターン

★……年齢の特徴 (頻数の多いものから記述したもの)

表2で明らかのように、実験①、実験②の両者から使用された運動の特徴を年齢別に、大まかにとらえると次のようである。

○ 3・5歳児……両足とび、スキップ、走歩がほとんどである。腕上下しながら○○する、が続く。

- 小学校2年……運動の種類が多くなり、回転、体前屈など身体を大きく使った運動が増加、スキップして歩くなどの組み合わせも現われる。
- 小学校5年……波動・ギャロップなどが現われる。両足とびで一回転など複合の運動が出はじめる。
- 中学校2年……回転と体前屈、ウオークしてジャンプなど組み合わせがほとんどである。身体の動かし方が大きく、体前屈、伸縮、振動なども胴体の使用へと変容する。動きの種類も多様な広がりを示す。
- 高等学校2年……種類数が中学に比べ減少するが、内容の高度化、複雑化がみられる。例えば、ウオークターン、ピボットターンなど。また、組み合わせ、複合の運動は中学に比べさらに多くなる。

(例えば、フォローしてバランス、回転してポーズなど)

これらのことから「イメージ刺戟」「リズム刺戟」に対する表現運動の発達の様相に特徴がみられ、これらのことをまとめると次の様である。

- ① 歩・走・跳・這うなど単一の運動から回りながら走るなど、複合の運動へと発達する。
- ② 手・足のみの運動から胴体を使ったり、身体の一部を意識した全体の運動へと発達する。
- ③ 短いパターンのものから、長さをもったフレーズのものへと発達する。
- ④ 粗雑な動きから精緻化された動きへと発達する。

上記の結果は、単に、刺戟一反応の形で行なわれた実験結果であるが、表現性を伴った運動であり、凝縮された形で身についたものしか表出されないことを物語ると言えよう。その運動内容は年齢が進むに従って変容しており、その変容のしかたから発達の特徴をとらえることができる。これらの結果はマイネルの学習過程論との一致をみるところである。すなわち、幼児から成人への発達における各時期、または、一定時点における学習過程は次のような3つの「段階」(Phase)に区分されるという。第一は、運動の基本過程を大ざっぱなフォーム(Grobform)で習得する段階。第二は、この荒削りのフォームを修正し、洗練する段階、第三は、新しく習得された「運動熟練(Bewegungsfertigkeit)が定着して、いろいろな条件に適應できる段階である。以上のような発達過程を踏まえて、次に表現運動の学習過程の、体系化を試みる。

(4) 発達段階に即した学習体系の試み

運動分類において述べた各種の運動、すなわち、移動運動、その場の運動、あるいは、日常動作などの運動を

発達段階に即して学習過程を明らかにするのであるが、年齢別に厳密に区分することは極めて困難である。表現しようとする題材に、もっとも適した運動を選んで動くということであれば、さらにその区分はむつかしくなるのである。そこで、基本となる運動の発達を軸としながら表現性をもつ運動を関連的に考慮して段階別学習内容とする。

1) 幼稚園、小学校低学年

——運動の基本過程、歩く、走る、跳ぶなどを大ざっぱなフォームで習得する段階——

幼児はきわめて、活発に動き、順序性に則って多くの基本的な運動ができるようになり、しかも多様性を示して発達していく。這い這いし、立ち上り、歩き、走るようになり、その後に跳び越しができるなどの順序性は、幼児の運動技能習得の中心となるものであり、幼児の特徴であるといえる。その他にも、投捕、よじ登るなど、多くの運動技能を習得し、入学前までに運動系のほとんどすべての基本形態や、走って跳ぶなど組み合わせの簡単なものにも習熟し、自分のものとするのである。しかし、幼児はほんの短い時間しか、ひとつの課題に集中してられないので、活動内容は変化に富んだものにし、興味をひくものでなければならぬ。ことに動物や乗り物などを好み、多くの遊びを経験するこの時期に、習得した基本技能を十分生かし、興味をもって、自ら選んで遊ぶ時間にも反復活用できるような表現遊びにさせたい。そのためにも、できるだけ身体全体をつかってのびのびと動き、そのものになりきって表現できるように走ったり、跳んだり、転がったり、パターンは短かくても、変化のあるものをリズムカルな動きとして経験させ、表現の遊び化が必要である。

小学校になると、運動能力発達の変化のなかに、乳幼児期にみられるような順次性を指摘することはできないが、幼児期で獲得した運動技能はより目的に合うような運動へと発達する。しかし、一部には、まだ活発で動きづくめの所があり、はっきりした運動浪費もみられ、ぎこちなさが残る。簡単なリズムに反応して動く能力では、ギャロップ、走、その場跳び、また単純な振動の往復運動など正しく反応できるようになるので、この期をとらえて、幼児期の基本技能を中心とした表現運動を、より幅広く喜こんでるようにしむけたい。

2) 小学校中・高学年

——この期は運動の基本過程の幅をさらに広げ、振動、回転、倒なども加え、組み合わせたり、複合の運動など

もできるようにする段階——

中学年は運動のなかに、大きな節約制が認められるようになり、運動課題に対して、正確、かつ適切に、力強く行なわれるようになる。すなわち、全身的巧みさと部分的巧みさと両面にわたって向上し、運動がどんどんうまくなれるようになり、安定してくるのである。とくに、特徴的なことは新しい運動経過をすばやく把握して習得したり、多様な条件に対してうまく適応する能力が発達する。運動を個々にわたって、どう行なうべきかを長く考えることをせず、運動の経過全体をまとめてすばやくとらえてしまうのである。

高学年になると、身体的にも均整がとれて、プロポーションのよい体格になる。身体を素材として表現するダンスに身体意識も加わり表現内容も豊かになってくる時期である。従って、基本的な走・跳・歩などの組み合わせたものや、より律動的で流れの加わる振動・回転、を多く取り入れたり、その流れを止める事によってより律動性を意識させるなどの工夫もさせたい。いわば、より幅の広い基礎運動と巧みな表現力をもって友達からも共感を得られるような表現運動となるよう力いっぱい全身で動けるようさせたい。

3) 中学校

——波動、伸縮、捻転、屈伸、平均、回旋なども含め、緊張や弛緩を伴った全身運動として、よい連続をつかさどるよう修正したりし練したりする段階——

思春期にあたるこの期の女子の運動は好ましい円味を帯びてくる。その運動は、恵まれた状態にあれば、乙女の優雅さと、よく言われる完全性へと高められる。しかし、この期は思春期の特徴として起こりやすい運動系の崩れがみられる時でもある。歩いたり、走ったりすることにおいても、バランスや軽快さを失い、ぎこちなくなったり、全身の運動協調が停滞、もしくは、低下することもある。このようなくずれを無くするためには、多彩な運動や身体活動を活発に続けて行なうことで調和が保たれ、自分の動きを意識的に調節し、向上させることができる。従って、ダンス指導においても、この時期に表現運動の学習がなされるか否かによって、今後のダンス学習に大きな影響を及ぼすことになる。表現のための運動学習を小学校期に引き続き、多面的、体系的に行ない、それに習熟することがこの期の精神的不安定さをも解消することになる。とくに、波動や伸縮、捻転、回旋、屈伸、平均などの運動に習熟することが性的成熟を

示す身体性を生かし、子どもっぽい素朴さだけでなく、自分で意識した運動の優雅さや正確さ、美しさなどを表現できることを知る。従って、この期は、身体全体を大きく、滑らかに動かし、流れるような、弾みのある優美な運動ができるよう、基礎的な運動から多彩な動きへと変化させながら修正したり、洗練させるようにし向けたい。

4) 高等学校

——表現性に密着した、いろいろな運動に熟練し、微細な動きまでも意識した運動の定着の段階——

成熟期にあたり、運動系は女らしい特徴を形づくりながら最高潮に至る。中学校期に起こしやすい運動の崩れ現象も、この期の多面的な運動系の活動によって完全にバランスを取り戻し、体型や運動系においても女性らしさを増す。歩き方においても、男性が大きい歩幅で力強く、直線的で、さらに、拍節に規制されるのに対し、女性のそれはさわめて軽快で弾みをもち、リズムカルで流れるような円味のある動きとなる。さらに、女性は筋力の要求されるものには達成力が弱い、部分的巧みさにおいては驚く程の発達をする。従って、身体全体をダイナミックに動かすなかで、微細な動きまでも意識した表現運動となるよう基本的な運動、組み合わせた運動などを多様にふくませながら熟練し定着させたい。特に、静の中に動を感じさせる程の制御された力が、表現できたり、間を大切に日本人独特の心まで表現できるような微細な運動まで身につけさせたい。例えば、歩く運動にしても、可能な限り速いリズムで歩いたり、反対にできるだけゆっくり、息を殺して1歩を出すという具合に運動の熟練のしかたを質的に高めることである。あくまでも基礎的な運動をくり返し経験させ多様化してゆくことと、運動をくり返しながらいメージ化する方法、あるいは、イメージを即座に運動に置きかえられるような経験を十分させてゆきたい。いずれにしても、学校ダンスの集大成であるので、単純なものも複雑なものも、単一なものも組み合わせられたものも、あるいは、複合されたものなども全身をつかい、しかも目、顔、指先、足先など身体の微細部分にまで心のゆき届いた表現となるような運動として習熟させたい。そのことが自由に動ける身体となり、自由に表現できる運動となると思うからである。

(5) 幼児の身体表現の指導について

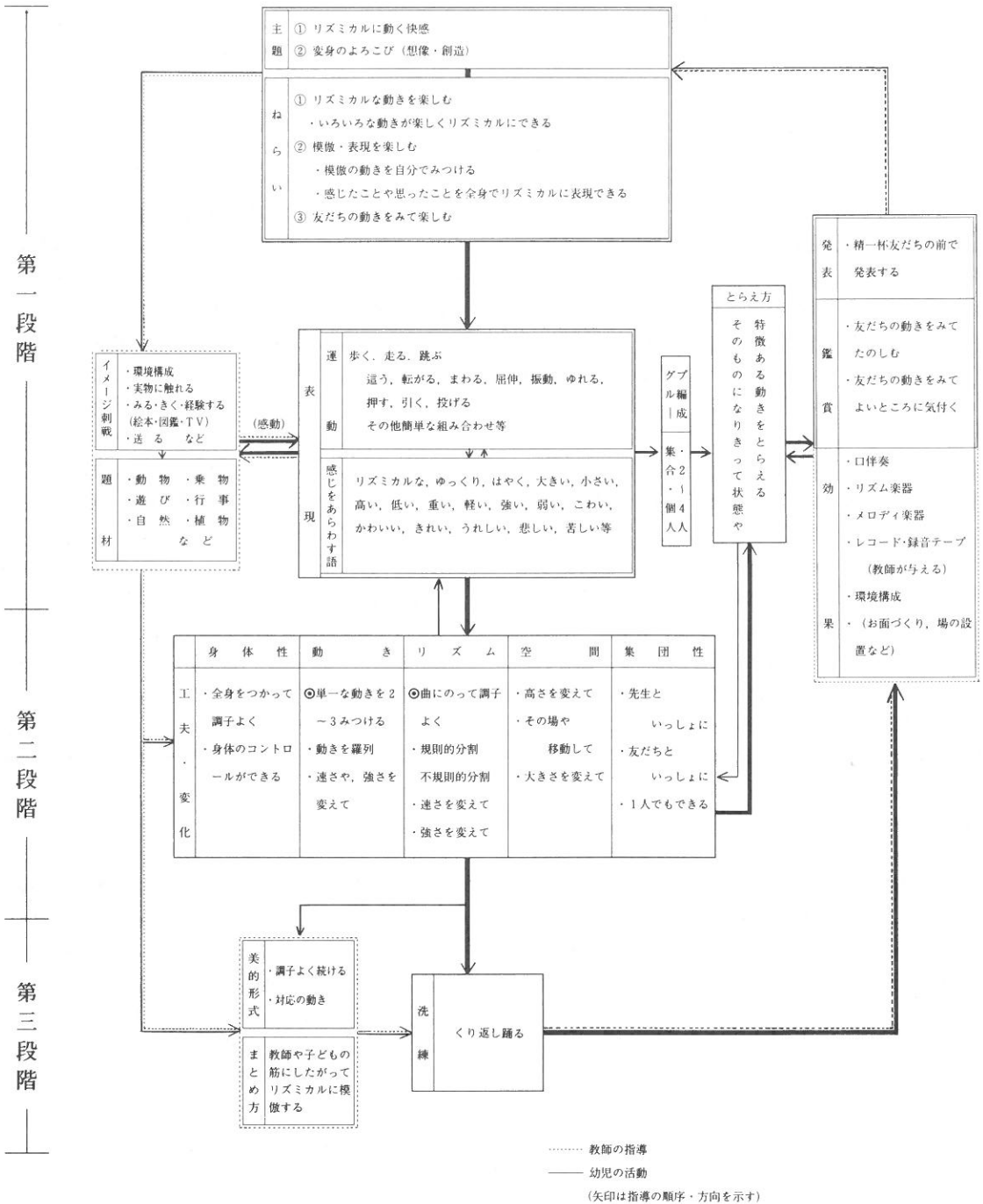
以上、大まかに発達段階に即した身体運動による表現の体系化を試みたが、これら一連の学習体系の中で、幼

児の身体表現をどのように位置づけ、保育してゆくのがよいであろうか。身体表現はいわゆる芸術といわれる美的な創造活動としてのダンスの世界へつながるわけであるが、いうまでもなく、「^{註⑥}幼児における表現活動はそうした域に近づいているわけではない。ただ、素朴な姿であるが、のちのちに展開されるダンスの特質の芽ばえを包蔵しているといえるのである。」幼児にとって表現活動は言語・絵画・音楽などと共に身体による表現を含んだ総合的なものであり、青少年や成人の場合のように、もろもろの方面の活動として分化していない。むしろ、幼児の場合は表現的な活動が人間形成にとりわけ大きな役割をもっているのである。坂元^{註⑦}は「幼児の表現活動は、心身全般にわたる総合的な真剣な活動であり、それは、身体的な機能や、運動神経をいっそう発達させるものであるとともに、知的なはたらき、認知や思考の力をも伸ばしたり、また、対人的な社会性さえ育てるものである」という。すなわち、幼児の表現活動は、ただ単に、想像力を伸ばし、情操を豊かにし、美的な方向へ向かうだけでなく、根源的なところで人間形成に重要な役割をになっている。こうした立場を踏まえた上で、「リズムカルに動くことの楽しさ」と「動きによる表現性の開発」をめざしながら、望ましい発達を助け、人間形成の一部に貢献できる身体表現となるよう期待したい。

今回は身体表現の大切な要素である運動の表現性をとらえ、体系化を試みたが、幼児期の表現は上記の立場を十分考慮し、不連続の連続を保持しながらの学習体系である。これらの学習体系の中で、幼児期の「運動と運動のもつ表現性」を中心にした表現活動の教授・学習過程について図式化して私案を述べる。(図1参照)

図1は幼児の表現活動の教授・学習過程に必要な要素を、指導の流れに従い、構造化したものである。主題、ねらいは文部省の示す教育要領に従って、動きの表現の特性を生かし、それ自体を十分楽しみながら目的が達成されるようにした。そして、それを達成する方法として、もっとも、中心となる運動要因と感情の入った表現的運動の関連を密にしながら、力いっぱい表現できるよう教師の働きかけを意図した。さらに、そのものになりきって表現する喜び、あるいは、発表、鑑賞する喜びを経験させる。この段階を第1段階とした。これをくり返しているうちに、自由遊びにおいても、自然に表現遊びが子どもから表出されるよう期待したいものである。幼児は大きなクマになって、恐れと威力を示す身ぶりや、あひるの親子づれが飼い主の餌をもとめて「ガアガア」と言いながらお尻を振り振りついて来る様子など、「幼児が

図1. 模倣・表現の教授・学習過程構造図



生活の中で見聞し、想像した、あらゆる事象に対する興味が「動き」というもっとも素朴な端的な媒体を通して表出される」^{註⑥} という特性を生かしたいのである。それは、経験の中で得た感動を自分の中で確かに凝縮し、創意によって技を見出し、感情を表出する活動であると言える。幼児は、感動したものを模倣する中で、その動きの表現に没入し、自分を解放し、想像の中で自分をつくり変えるのである。このような経験の中で、自己を拡大し、新しい外の世界への探究心を育てて豊かな発達ができるならば、動きの表現の意義はより大きなものとなる。

さらに、その空想の世界を発展させ、表現活動をさかんにさせるために、教師の助言や配慮によって、工夫・変化の要因に気づかせる段階を第2段階としたい。曲によって調子よく動いたり、いろいろな場所を選んで動いたり、高さや、大きさを変えて全身を力いっぱい動かすことが、より自分の解放感を高め、変身の満足を得させるとともに虚構の世界へ没入出来ることになろう。身体性、動き、リズム、空間、集団性など工夫・変化の要因を拡大することによって、模倣・表現遊びをより楽しくし、新しい表現技法をつくり出していく衝動と美的因子を加えてゆくことになる。このような「自己表出と美的遊びは、動きの表現の最も大きな特性である」^{註⑥}

第3段階として、教師が中心となり子どもと一っしょに、簡単な筋をつくる。それに従ってリズムカルに模倣・表現をし、友達と一っしょに役を変わりあったりしながら、くり返し踊ることによって技の高まりを得させたい。技の高まりは、カイヨワ（R.Caillis）の言う遊

びの特性として挙げている眩暈の状態を高めることである。だんだん速くなっていくリズムにのって旋回を速めたり、こまになってスピードを加えて回ったり、走って行ってびよんと高く跳んで降りても、バランスがくずれないようにするなど、身体の調整的な動きを高めることになる。それは、いろいろな題材や内容の表現をより巧みに表わす根源の特性とも言え、踊る内に恍惚状態を高めることともなる。さらに、調子よく動けるようになった作品を、友だちや先生、あるいは、家族の前でも精いっぱい踊ることができるならば、のちのち展開されるダンスに発展することになるし、より進んだ身体支配への楽しみを開発することになる。それは、表現したことの満足感であり、心身の発達を促進する望ましい刺激として、独自の意義をもつことになるであろう。

以上、指導の流れにそって、第1段階から第3段階までの学習体系について私案を述べたが、それぞれの段階で、常に、ねらいにフィードバックし、確かめながら発展的に順回させ、機能させることが大切である。しかし指導においてつねに問われる「何を」「いつ」「どこで」「どのように」ということを、これで全て解決できるとは言えない。これらの学習内容を現場で機能させ、効果的な指導方法と結びつけるためには多くの問題解決が残っている。それは、指導者自身の指導力の問題であり、保育形態、保育時間、環境構成、保育内容など保育計画全般にわたる問題もあろう。

今回は、上記理論に基づいて、私案を述べたが、今後、実験、検証へと研究を進め、自由表現の学習体系をさらに明らかにしていきたい。

引用文献

- 註① 文部省、高等学校学習指導要領 昭和53年8月、P47
- 註② 坂元彦太郎、幼稚園教育要領解説、フレーベル館、P.17
- 註③ 川口千代、体育の科学、体育の科学社 Vol 35.1 1985
- 註④ 磯島紘子、舞踊作品の分析的研究、研究紀要、第17号、1973、岡山県立短期大学
- 註⑤ 西谷怜子、舞踊における動きのリズムについて、研究紀要、第17号、1973、岡山県立短期大学
- 註⑥ 坂元彦太郎、幼児教育学全集(6)情操と表現、小学館、P273
- 註⑦ 同上 P11
- 註⑧ 同上 P272
- 註⑨ 同上 P273

参考文献

- ①クルト・マイネル著 金子明友訳、マイネルスポート運動学、大修館書店

- ②萩原仁，調枝孝治，知覚-運動行動のシステム分析，不昧堂出版
- ③続有恒編著 教育学叢書(18) 精神発達と教育，第一法規
- ④猪飼道夫・高石昌弘 教育学叢書(19) 身体発達と教育，第一法規
- ⑤時実利彦，教育学叢書(20) 情操意志・創造性の教育，第一法規
- ⑥坂元彦太郎，幼児教育学全集(16) 情操と表現，小学館
- ⑦R.カイヨワ著，清水幾太郎・霧生和夫訳，遊びと人間，岩波書店
- ⑧松本千代栄著 舞踊美の探究，大修館書店
- ⑨松本千代栄編，ダンス・表現，学習指導全集，大修館書店
- ⑩水谷光編 音楽リズムの指導，建帛社
- ⑪荒木恵美子，幼児の自由表現の指導に関する考察，研究紀要，第24号，1980，岡山県立短期大学
- ⑫岸野雄三，松田岩男，宇土正彦編，序説運動学
- ⑬石田恒好編著，発達心理学，協同出版株式会社，1968

(昭和60年3月30日受理)